興味アル尿道異物ノ1例ニ就テ

日本赤十字社朝鮮本部病院皮膚科泌尿器科（主任 森山博士）

花 圃 美 地 雄

Aus der Dermato-Urologischen Abteilung des Rotenkreuz-Hospitals

zu Keijo. (Direktor: Dr. G. Moriyama)

Ein interessanter Fall von Fremdkörper in der Urethra.

von

M. Hanazono.

Neuerdings habe ich einen Fall von Urethraffremdkörper beobachtet.

Krankengeschichte; Ein 15 jähriger Schüler. Familiäre Anamnese zeigt nichts besonders.

Seit 10 Jahren bekam der Patient Miktionschmerz, Harndrang, und Haematurie nach körperlichen Überanstrengungen. In den letzten Zeiten haben sich diese Beschwerden in dem Masse vermehrt, dass er nur tropfenweise urinieren konnte und dass er den Miktionschmerz, nicht mehr zu ertragen vermochte, so besuchte er am 15. Febr. 1935 einen Arzt und wurde von ihm katheterisiert, unter der Diagnose von Striktura Urethrae. Bei dem Herausziehen des Katheters aus der Urethra brach die Katheterspitze ab und blieb in der Urethra zurück.

So wurde er zu unserer Klinik geschickt. Allgemeinbefinden; Ein gut gebauter aber etwas anämischer, leidend aussehender Jüngling. Guter Puls und normale Atmung, Innere Organe belanglos. Wa. R. (—) M. T. R.₃ (++) Murata's R. (—) PIRQUET's Reaktion negativ, Blutsenkungsgeschwindigkeit 46.5 m.m Harn; blutig getrübt, enthält reichliche polynucläre Leukocyten, mässig viele Erythrocyten und Epithelzellen, keine Mikroorganismen. Lokalbefund: Die äussere Urethralmündung, Hoden, Hodensack und Nebenhoden sind normal.

In der Dammgegend konnte ich einen elastischharten strangartigen Fremdkörper und einenkleinfingerspitzgrossen steinharten Fremdkörper palpieren. Deshalb führte ich sogleich Urethrotomia externa unter lokaler Anästhesie aus und aus der Schnittwunde exstirpierte ich ein ca. 8cm langes Stück von Nelaton's

katheter und einen grobhöckrigen 1.5cm lang, 1.0cm breit und 0.9 gr. schweren Stein. (Autoreferat)

第 1 章 緒 言

尿路異物ノ中、實地醫家ノ屢々遭遇スルハ膀胱異物ニシテ、尿道異物ハ比較的稀有ナルモノノ如ク、歐米ニ方テハ既ニ Kaufmann, Burckhard, Englisch, Lichtenberg, Pleschner, Haslinger, Molner, Howard 氏等ノ外ソノ報告敢テ少シトセザルモ、本部ニ於テハ明治28年井坂氏ガソノ一例ヲ報告セシ以來余ノ涉獵セル文獻ノ範圍内ニ於テハ僅々30例餘ヲ出デズシテ、即チ松原及ビ天野、山口、一宮、古賀、坂田、中林、中尾、弓削、堀江、濱田、下村、山本、大島、伊藤、龜田、室井、鈴木、大塚、及川氏等ノ各1例及ビ小澤、村上、山本及ビ大森、長谷川、井尻氏等ノ各2例及ビ鈴木氏ノ3例ノ數フルニ過ギズ。就中鈴木氏ハ昭和5年本邦ノ症例26例ニ就キテ詳細ナル統計的觀察ヲ遂ゲ、又昭和9年、山本及ビ大森兩氏ハ之ニ自家症例2例ヲ追加シテ統計的觀察ヲ試ミタリ。余ハ最近ソノ機轉上ヨリ觀テ極メテ興味アリト思ハレタル1例ニ遭遇シタルヲ以テ茲ニ報告シ、併セテ聊カ考察スル處アラントス。

第 2 章 症 例

患 者 深堀某、内地人男、15歳、學童、京城府在住。

初 診 昭和10年2月15日。

家族歴 父ハ41歳、母ハ45歳ニシテ共ニ健在シ同胞6人ノ中患者ハ第3兒トシテ生ル。家族的ニ精神病及ビ遺傳的疾患ヲ證明セズ。

既往歴 患者ハ生來頑健ニシテ幼時麻疹ヲ經過セル外ハ内科的疾患ヲ知ラズ。只4歳ノ頃放尿時ニ際シ小豆大白色乳狀ノ凝塊物ヲ排出シ爲メニ醫治ヲ受ケタルモ對症療法トシテ投藥ヲ受ケタルノミナリシト言フ。學童トナルニ及ビテ放尿時疼痛及ビ排尿困難ヲ訴フルニ至リ過度ノ徒步及ビ運動ニ際シ時トシテ血尿ヲ見ルニ至リタレ共、ソノ爲ニ特別ノ醫療ヲ受クル事ナク經過セリ。長ズルニ從ヒ血尿ハ漸次消失スルニ至リタルモ排尿困難ハ益々ソノ度ヲ加ヘ尿意頻數ニ悩ムニ至レリ。

現症歴 昭和10年2月15日朝、府内某醫ノ診療ヲ受ケタルニ尿道狹窄ノ診斷ノ下ニ、導尿ノ目的ヲ以テ「ネラトン氏カテーテル」ノ挿入ヲ受ケタルニ尿道異常ノタメ十分目的ヲ達スルコト能ハズ途中ニシテ「カテーテル」ヲ拔出セントシタルニ「カテーテル」ガ尿道ノ或部位ニ固着セルタメ遂

ニ途中ヨリ斷裂シテ尿道内ニ殘存シ、タメニ排尿全ク不可能トナリ吾ガ外來ヲ訪レタリ。

現 症 骨骼筋肉共ニ年齢ニ比シ佳良ナル發育ヲ遂ゲ皮膚ハ稍々貧血狀ヲ呈シ、顔面ハ稍々苦悶狀ヲ呈ス。内診上、肺及ビ心臓ニ異常ナク、觸診上、兩腎ヲ觸知セズ、又壓痛ナシ。膀胱部ハ稍々膨滿スレド壓痛ナク、無熱ニシテ食欲稍々減退ス。Wa, R(—), M. T. R₃(++)、村田氏法(—) Pirquet. R. (—)、赤血球沈降速度 平均46.5ナリ。外陰部ヲ診スルニ外尿道口、陰囊、睾丸及ビ副睾丸ニ異常ナシ。會陰部ニ於テ彈性硬ナル索狀物ヲ觸知シ同所ニ更ニ小指頭大ノ異物ヲ觸レ壓痛アリ、而モ該部ニ固定シテ移動セシムルコト能ハズ。

療法及ビ經過 以上ノ他覺的所見ニヨリテ會陰部ノ索狀異物ハ殘存「カテーテル」ヲ惟ハシメタルモ小指頭大ノ硬キ異物ハ更ニ他種異物ノ存在ヲ惟ハシメタリ。故ニ直チニ局所麻酔ノ下ニ會陰部ニ於テ外尿道切開ヲ加ヘシニ長サ約8cmノ「ネラトン氏カテーテル」ノ斷片ト共ニ同所ヨリ更ニ小指頭大ノ黃褐色橢圓形ノ結石1個ヲ摘出セリ。該「ネラトン氏カテーテル」ハ既ニ陳舊ニシテ彈性ヲ

失ヒ「ネラトン氏カテーテル」Nr. 5ニ相當シ、該結石ハ長徑1.5cm, 短徑1.0cm, 重量0.9grニシテ表面稍々鋸齒狀ヲ呈シ外觀上磷酸結石ヲ思ハシム。以上摘出後創面ヲ縫合シタル後尿道内ニ留置「カテーテル」ヲ行ヒ導尿セリ。第1日目排尿量約500gr. 外觀上多少血性ニ濁濁シ、蛋白陰性、弱酸性ニシテ糖及ビ尿圓柱ナク檢鏡上多核白血球(十)、赤血球(卅)、上皮細胞(卅)、細菌ナシ。ソノ後連日留置「カテーテル」ヲ交換スルト共ニ硼酸水乃至ハ「カメレオン」溶液ヲ以テ膀胱洗滌ヲ施行シ、「トリパフラビン」及ビ「ロゼノン」ノ靜脈内注射ヲ施セリ。留置「カテーテル」ノ爲メ患者ハ當初尿道部及ビ膀胱部ノ疼痛ヲ訴ヘタルモ金屬「カテーテル」ヲ「ネラトン氏カテーテル」ニ換フルニ至リシ以後ハ疼痛大ヒニ輕快シ食欲モ大ヒニ増進シ尿モ全ク清透トナリ創面亦殆ソド癒着シタルヲ以テ入院後27日目ニシテ退院セシム。退院後留置「カテーテル」ヲ拔去シタルモ創面ヨリ時トシテ少量ノ尿漏アルノミニシテ、排尿ハ手術前ノ困難ナリシニ比シ手術後ハ極メテ容易ニシテ以前ノ苦痛ハ全ク取去ラレタリト言フ。

第 3 章 考 察

以上述べタル余ノ症例ハ尿道結石ノ存在ヲ知ラズシテ醫師ガ導尿ノ目的ヲ以テ「ネラトン氏カテーテル」ヲ使用シ、ソノ拔去ニ際シテ結石ト尿道間ニ嵌入セル「カテーテル」ノ陳舊ナリシガ爲ニ遂ニ斷裂シテ尿道異物トナリタルモノニシテ翻ツテ從來ノ文獻ヲ按ズルニソノ機轉上全ク余ノ症例ト轍ヲ一ニセル昭和5年室井氏ノ報告アルノミニシテ極メテ興味アリト謂フヲ得ベシ。患者既往歴ヨリ考察スルニ幼時ヨリ既ニ排尿困難ヲ訴ヘ而モ激動ニ際シテ血尿ヲ訴ヘタルハ當時ヨリ尿道結石ノ存在ヲ察知スルニ十分ニシテ當時ニ於ケル血尿ハ結石ニヨル尿道損傷ヲ思ハシメ、長ズルニ從ヒテ排尿困難ノ益々著明トナリタル事實ハ結石ノ増大ニ因ルヲ察スルニ十分ニシテ、既ニ10年以上ヲ經過セルタメ遂ニ結石ハ尿道ト固着スルニ至リ、タメニ挿入セル「カテーテル」ノ一部ガソノ間ニ嵌出シタルモノナル可シ。

以下余ハ從來ノ文獻ト余ノ症例トヲ比較對照シ聊カ考察セント欲ス。

1) 異物ノ種類 尿道異物ノ種類ハ從來諸家ノ報告ヨリ觀ルニ種々ナル「カテーテル」、「帽子ピン」、髮針、縫針、針金、植物ノ莖、骨片、穀物ノ穗、樹枝、寒暖計、毛髮、「ゴム管」、爪、「ブージー」、松葉、眞輪器具、筆ノ軸、外科用絹絲、彈丸、齒牙、豆類、安全留針、木製煙草

具, 硝子棒, 紐, 「カプセル」, 木片, 鍵, 釦, 鉛筆, 「ギブス」, 蠅蛆, 蛔虫等ニシテ鈴木氏ノ統計の觀察ニヨレバ, 「カテーテル」類及ビ針類最も多キヲ報ジ, 又蠟燭及ビ蠟様物質, 植物ノ莖, 針金, 寒暖計ノ如ク其ノ形狀細長クシテ外尿道口ヲ容易ニ通過シ得ルモノ比較的多キガ如ク, 又稀ニ外尿道ノ經由セザル尿道異物トシテ骨片等ノ報告アリ。余ノ症例ハ「ネラトン氏カテーテル」Nr. 5 ガ結石ト共ニ存在シタルモノニシテ前述セルガ如ク只室井氏ノ一例アルノミナリ。然レ共異物ノ種類ハ各國ニ於ケル風俗習慣ニヨリテ大ヒニソノ趣ヲ異ニシ, 我國ニ於ケル異物ハ「カテーテル」類及ビ蠟様物質最も多キニ反シ, 歐米ニ於テハ針類最も多ク, 例之, Englisch ハ症例186例ニ於テ有頭針35例, 縫針12例, 髮針24例ニシテ針類ノ總類ハ71例(38.2%)ナリシヲ報ジ, Burckhard モ亦針類最も多ク(41.3%), 次ハ「カテーテル」及ビ「ブージー」類ノ比較的多數ナリシヲ報ジタレ共, 翻ツテ本邦ニ於ケル文獻ヲ按ズルニ針類ガ異物トナリシハ小澤, 山本, 氏等ノ各1例ヲ算スルノミニシテ, 又風俗, 習慣ノ差異ニヨリテ未ダ帽子「ピン」(Levy), 髮針(G. Berg, Tierny)等ノ如キ異物ノ症例ニ至リテハ本邦ニ於テハ發見スル能ハザル處ナリ。

2) 年齢, 性別 山本, 大森氏ノ報告ニ依レバ尿道異物ハ11歳—20歳ノ7例ヲ最多トシ, 31歳—40歳ノ6例之ニ次ギ, 男子20例, 女子3例ナリト言ヒ, 鈴木氏ニヨルバ11歳ヨリ30歳迄最も多ク(24例, 51%), 性別ヨリ觀テ觀察例60例ノ中男子57例, 女子3例ニシテ男子ノ遙カニ多キヲ報ゼリ。余ノ症例ハ15歳男子ニシテ何レモ從來諸家ノ統計の觀察ニ一致セリ。

而シテ尿道異物ガ11歳—30歳迄ノ年代ニ多數ナル理由トシテ, 斯ノ如キ年代ニ於ケル性的機能ノ亢進スル結果自慰ニ陥リ易キトガソノ主ナル因子タリ得ルコトハ首肯シ得ラルル處ニシテ, 山本, 大森氏等ノ報告ニヨレバ自慰ニヨル尿路異物38例ノ中, 11歳—30歳ニ於テハ實ニ60例ノ多數ヲ算シタル點ヨリシテ, 又 Hirschfeld, Rohleder 等ノ報告ニヨルモ明白ナル事實ナリ。

又男子ノ尿道異物ニ比シ女子ノ央レガ少數ナルハ男子ニ比シ女子ガ自慰ニ陥ルコト少ナント觀ルヨリモ寧ロ女子尿道ノ解剖學の見地ヨリシテ女子ニ於テハ尿道ノ短且ツ廣濶ナルタメ假令異物ヲ挿入スルモ, 擴張性ニ富ムヲ以テ拔去シ易ク, 又膀胱内ニ落下シ易キヲソノ主因トナスヲ至當トス可ク, 山本, 大森氏ノ報告ニ於テ男子尿路異物ノ中膀胱, 尿道ハソノ發生率5.6:1ナルニ比シ女子ニ於テハ膀胱, 尿道ガ17.7:1ヲ算シタルハヨクコノ間ノ消息ヲ物語ルモノト言フ可シ。

3) 異物ノ經過及ビ由來 外尿道口ヲ經テ異物ガ尿道ニ侵入スルコトハ最も多キモノニシテ大森, 山本氏ノ報告ニヨレバ75.6%ナリト言フ。而シテソノ由來ニ關シテハ手淫及ビ色慾錯誤症等ノ如キ性慾性關係ガ重大ナル意義アルモノノ如ク, ソノ異物ノ種類, 年齢其他ノ狀態ヨリ推理シテ恐ラクハ以上ノ關係アル可シト思惟セラルルモノ多數アリテ山本, 大森氏ノ報告ニヨ

レバ侵入機轉ノ中自慰ニ由來スルモノハ調査數ノ過半數ヲ占ムルト言フ。而シテ導尿及ビ尿道狹窄擴張等ノ目的ヲ以テ醫師或ハ患者自身ニヨリテ「カテーテル」或ハ「ブージー」等ガ挿入セラレ、誤リテ尿道内ニ嵌入セルモノハ鈴木氏ニヨレバ第2位ヲ占メ65例中11例ナリト言ヒ山本、大森氏亦之ニ賛セリ。余ノ症例ハ全ク之ニ一致スルモノニシテ而モ醫師ノ加療中誤リテ「カテーテル」ガ尿道内ニ嵌入シタルモノニシテ、從來諸家ノ文獻ヲ按ズルニ醫療ノ過失ニヨル尿道異物ハ大島、龜田、室井氏等ノ各1例ヲ見ルニ過ギズ。而シテ患者自身ガ醫療器械以外ノ物質ヲ加療ノ目的ヲ以テ挿入スル場合ニ於テハ或ハ色慾的關係ノ存スルコトモ亦否定シ能ハザル處ニシテ、Blum 及ビ Sommer ノ症例ハソノ好適例ナリト言フ可シ。然レ共堀江氏ノ報告例ノ如ク幼兒ノ惡戯或ハ「ヒステリー」、精神病、墮胎、避妊等ニ由來スル尿道異物ハ稀ナルモノノ如シ。

次ニ尿道壁ヲ通ジテ直接異物ガ尿道内ニ來ルコトハ外尿道口ヲ經過セルモノニ比シ極メテ稀有ナルモノニシテ大森、山本氏ノ報告ニヨレバ尿路異物中斯ノ如キ症例ハ24.4%ナリト言ヒ、松原、天野兩氏ハ毛髮、齒牙、小骨、結石ヲ内容トセル皮様囊腫ガ尿道ニ發生セル一例ヲ報ジ、Rönigハ骨盤骨折患者ノ耻骨縫際部骨片ガ尿道内ニ穿入セルヲ記載セリ。要之、外傷ニヨリテ或ハ尿路手術時ニ於ケル諸種材料(例之、結紮絲等)、骨盤ノ腐骨、皮様囊腫ノ内容物等ハ尿道異物ヲナスモノノ如シ。

次ニ膀胱ヨリ來ル尿道異物ハ外傷ニヨリテ膀胱壁ヲ通ジテ侵入セル異物或ハ膀胱ト周圍臟器トノ病的交通及ビソノ附近ノ手術時ニ於ケル遺存物等ガ尿道ニ嵌入スルトセラレ、例之古賀氏ハ下腹部盲管銃創ニヨル彈丸ガ舟狀窩ニ達セル一例ヲ報ジ、大島氏ハ卵巣囊腫手術時ニ於ケル遺殘絹絲ガ膀胱内ニ現ハレ遂ニ之レガ尿道中ニ嵌入セルヲ報ジ、ソノ他コノ種ノモノニ Kaufmann, 中尾、一宮氏等ノ報告アレ共、斯ノ如キ侵入經過ヲ取ル尿道異物ハ外尿道口ヨリ侵入スルモノニ比スレバ極メテ稀ニシテ鈴木氏ニヨレバ65例尿道壁並ビニ膀胱ヨリ來ル尿道異物ハ8例(12.3%)ナリト云フ。

4) 症 狀 尿道ノ異物嵌入ニヨリテ發スル症狀ハ嵌入部位、異物ノ大小及ビ性状ソノ他ノ要約ニヨリテ必ラズシモ一樣ナラザレ共、多クハ嵌留部位ニ於ケル疼痛及ビ排尿障礙ヲ惹起スルモノニシテ又時トシテ出血ヲ伴フコトアルハ諸家ノ報告ニヨリテ明ラカナル處ニシテ、余ノ症例ニ於テハ幼時ヨリ存在セル尿道結石ノタメ排尿困難及ビ尿意頻數ヲ訴ヘタルモノニ、更ニ「カテーテル」ノ斷片ガ異物トナリテ同所ニ嵌入セルモノニシテ爲メニ全ク排尿ハ不能トナリタルモノナリ。而シテ排尿障礙トシテハ異物ノ機械的作用ニ依リ、又ハ反射的ニ外括約筋ノ攣縮ヲ惹起シ爲メニ往々ニシテ完全尿閉ヲ來スコトヲモ推知シ得可ク、或ハ然ラザル迄モ尿線狹少、尿意頻數ヲ來シ特ニ異物ガ後部尿道ニ嵌入セル場合ニ於テハ尿淋瀝ヲ起ス事稀ナラズシテ、余ノ症例ニ於テ患者幼時ニ於ケル排尿異常ハ既存セル結石ニ由來シソノ症狀モ全ク上述理論ニ

適合セリ。

而シテ一般ニ尿道異物ハ多クハ速カニ醫療ニ依リテ除去セラルルモノナレ共、時トシテ數ヶ月乃至ハ數ケ年間モ尿道内ニ存在スルコトアリテ、例之弓削氏ハ稻ノ莖ガ約1ケ月間尿道内ニ稽留シテ結石ヲ形成セルヲ報ジ Vermooten ノ1例ハ毛髪ガ8年間尿道内ニ存在シ Molnar ハ7年間爪ガ尿道後部ニ存在セル1例ヲ報ジ、余ノ症例ニ於テハ嵌入「カテーテル」ハ直チニ除去シタレ共、ソノ嵌入ノ基ヲナセル尿道結石ハ既ニ10ケ年以上モ不知不識ノ中ニ經過シ來リシモノナリ。

尙又異物嵌入ニヨリテ異物性尿道炎ヲ惹起シ延ヒテ二次的ニ上昇性膀胱炎乃至ハ腎盂炎又ハ腎盂腎炎ヲ惹起スルニ至ル可キハ想像スルニ難カラザル處ニシテ余ノ症例ニ於テモ排尿ノ檢鏡ニヨリテ上昇性膀胱炎ノ狀ヲ窺知シ得タレ共、之ハ嵌入「カテーテル」ニ起因スルモノニ非ズシテ既ニ10年以上嵌入セル尿道結石ニ基クモノナル可シ。

5) 異物嵌入部位 異物ノ嵌入部位ハ種々ノ要約ニヨリテ異ナルモノニシテ、之ヲ精細ニ確定スルコトハ困難ナルモノノ如ク、諸家ノ報告ニヨルモノソノ嵌入部位ニ就キテハ記載ヲ缺クモノ多ク、鈴木氏ノ報告ニヨレバ34例中、尿道膜様部及ビ球部ニ存在セルモノ14例(41%)ニシテ最高率ヲ示シ、尿道振搖部8例ニシテソノ中3例ハ舟狀窩ニ存在シ、全尿道ニ亘レルモノ2例ナリシヲ報ジ、Jos, Englisch ハ102例中舟狀窩ニ存セルモノ3例、尿道振搖部19例、陰囊後部ニ嵌入セルモノ11例ニシテ、膜様部ニ存スルモノ最モ多クシテ41例、膜様部ト陰囊部ニ亘ルモノ28例ナリシ點ヨリ觀レバ、尿道異物ハ膜様部及ビ球部ニ存スルモノ多キガ如ク、余ノ症例ニ於テハ陰囊後部ニ存在セリ。即チ余ノ例ニ於テ比較的嵌入スルコト少ナキ陰囊後部ニ「カテーテル」ガ嵌入セルハ膀胱ヨリ排出セラレタル尿道結石ガ生理的ニ狹隘ナル陰囊後部ニ嵌入シタルガ爲ニ「カテーテル」ガ該部ニ嵌入殘存スルニ至リタルモノナル可シ。

6) 診 斷 尿道異物ノ診斷ハ以上ノ諸症狀並ビニ既往歴ニヨリテ左程迄困難ナルモノニ非ラザレ共、尿道異物ノ存在部位及ビ異物ノ種類ノ診斷ニ當リテハ只外部ヨリノ觸診ノミヲ以テシテハ事實上困難ナル場合多クシテ余ノ症例ニ於テハ挿入セル「カテーテル」ノ殘存ハ會陰部ヨリノ觸診ニヨリテ確定シ得タル共、同所ニ共存セル尿道結石ノ診斷ニ當リテハ確定シ能ハザリキ。

又斯カル際ニ診斷ノ確診ヲ得ルガ爲ニ消息子検査法ヲ推奨スル人アレ共、コノ際細心ノ注意ヲ拂フニ非ラザレバ異物ノ膀胱内脫落乃至ハ異物ノ破碎等ヲ來スコトアルヲ以テ、尿道鏡検査法ヲ推奨スル人或ハWaelli, Haslinger, Handengue, Fuchs, Pankratiev, 山本, 伊藤氏等ノ如ク「レントゲン」學的検査法ヲ推奨スル人アリ。然カレドモ余ノ症例ニ於テハ事急ヲ要シ「カテーテル」ノ存在確實ナリシニヨリ直チニ手術摘出ヲ行ヒシナリ。

7) 異物除去法 尿道異物除去法トシテ從來諸家ノ報告ヲ見ルニ諸種ノモノアレ共、要之侵

入部位、異物ノ大サ及ビ性狀或ハ嵌入前後ニ於ケル合併症ノ如何ニ依リテ各々異ナレリ。之ヲ大別シテ觀血的療法ト非觀血的療法トニ別ツコトヲ得可シ。山本、大森氏ノ統計的觀察ニヨレバ尿道異物19例中觀血的除去7例、非觀血的除去12例ニシテ非觀血的ノモノ稍多カリシヲ報ゼリ。要之尿道異物ガ外部ニ近ク存スルガ爲メニ非觀血的除去法ヲ以テスルモ除去シ易キ場合多キヲ示スモノナレ共、異物ガ過大ニシテ而モ尿道ト固着シテ不動性ナルカ或ハ可動性ナルモ之ヲ非觀血的ニ摘出セバ尿道粘膜ニ大ナル損傷アルヲ思ハシムル場合ニ於テハ非觀血的ニ取出スコト事實上不可能ニシテ余ノ症例ニ於テモ異物ガ陰囊後部ニ殘留セルノミナラズ全く不動性ニシテ且ツ同所ニ性狀ヲ異ニスル異物2個ノ存在ヲ豫想セシメタルヲ以テ尿道外截開術ニ依リタルモノニシテ從來ノ報告ヲ見ルニ余ト同ジク尿道外截開術ニヨリタル人ニBusch, Haslinger, Häuer, 坂田, 濱田, 室井, 鈴木, Pankratz, Molnar, Berg, Waelli, Swan, Pleschner Rathbun, 等ノ報告アリ。及川, 古賀氏ハ外尿道切開術ニヨリ、又松原, 天野兩氏ハ尿道ニ發生セル皮様囊腫ヲ腔ノ前壁ニ切開ヲ加ヘテ除去セルヲ報ジ、Busch, Maelli, 氏等ハ半バ非觀血的ニ半バ觀血的ニ除去セル興味アル症例ヲ報告シ、伊藤氏, Haslinger, Bonnet et Simonnet 等ハ膀胱高位切開ヲ必要トセル症例ヲ報ゼリ。

非觀血的療法ハ異物ノ比較的小ニシテ且ツ前部尿道ニ存スル症例ニ於テハ先ヅ試ム可キ方法ニシテ、異物ヲ抽出スニ尿道異物鉗子ヲ使用シタル例(Hunter, Leroyd, Etiolles, Kollmann Collin, 小澤, 下村, 山本, 大塚氏等)、或ハ「ピンセット」麥粒鉗子、球頭消息子、耳科用異物鉗子ヲ使用シタル報告等アリテ、小澤, 山本, Tierny, Levy, Mulf, Sofronow 等ノ報告ノ如ク尿道鏡の操作ノ下ニ非觀的ニ異物ノ除去ヲ計ルコトハ稍々確實性ニ富ム方法ナリト思惟ス。

要之、觀血的タルト非觀血的タルル間ハズ吾人ガ尿道異物ニ遭遇セン際ニハ、突嗟ノ場合ニ佳クソノ狀態ヲ考慮シ可及の速カニ適宜ノ方法ヲ講ズルト共ニ異物ニ依ル續發症ノ治癒ヲモ計ル可キモノナリト信ズ。

第 4 章 結 論

1) 余ハ15歳内地人男子ニシテ尿道結石ト共ニ「ネラトン氏カテーテル」ヲ異物トセル一例ニ遭遇セリ。

2) 該異物ハ患者ガ幼時ヨリ有シタル尿道結石ニ氣付カズシテ醫師ガ導尿ノ目的ヲ以テ「ネラトン氏カテーテル」ヲ挿入シ、ソノ先端ガ尿道ト結石トノ間ニ嵌入シ、「カテーテル」陳舊ナリシガ故ニ遂ニ中途ヨリ折損シテ結石ト共ニ留マレルモノナリ。

3) 異物ノ摘出ハ會陰部ニ於ケル外尿道切開法ニ依レリ。摘出セル「カテーテル」ハ「ネラトン氏カテーテル」Nr. 5ニ相當シ、長サ約8cmニシテ、結石ハ長徑1.5cm, 短徑1.0cm, 重量0.9gr, 表面稍鋸齒狀、黃褐色橢圓形ニシテ外觀上磷酸結石ヲ思ハシメタリ。

欄筆ニ當リ醫長森山博士ノ御指導ニ對シ深謝シ、併セテ御校閲ヲ賜ハリタル
長崎醫科大學皮膚泌尿器科教室駒屋教授ニ感謝ノ意ヲ表ス。

主 要 文 獻

- 1) **Adrian**: Deutsch. med. Wschr. 1910. S. 1585. 2) **Busch**: Zeitschr. f. Urol. Bd. 17. 1923.
- 3) **Bonnet et Simonnet**: Zeitschr. f. Urol. Bd. 21. 1927. 4) **堀江正禮**: 北越醫會誌, 第37年, 6號, 大正11年. 5) **濱田健男**: 皮尿誌, 第24卷, 7號, 大正13年. 6) **Haslinger**: Zeitschr. f. Wrol. Chirurg. Bd. 29. 1930. 7) **井坂爲則**: 岡山醫會報, 第75號. 8) **一宮乙熊**: 鎮西醫報: 88號. 9) **伊藤謙造**: 皮膚紀要, 第13卷, 2號. 10) **井尻辰之助**: 皮尿誌, 33卷, 1號. 11) **龜田威夫**: 日泌尿會誌, 第19卷, 2號. 12) **古賀玄三郎**: 日外會誌, 第8回, 第1號. 13) **Lichtenberg**: Zeitsch. f. Wrol. Chirurg. Bd. 6, 1921. 14) **松原, 天野**: 東京醫會誌, 第13卷, 9號. 15) **室井胤次郎**: 東京醫誌, 第54年, 第2666號, 昭和5年. 16) **村上幸多**: 日泌尿會誌, 第17卷, 4號. 17) **中尾東陽**: 皮尿誌, 第9卷, 4號. 18) **大島恒義**: 日外會誌, 第27回, 7號, 大正15年. 19) **Pleschner**: Zeitschr. f. Wrol. Chirurg. Bd. 27, 1929. 20) **下村四郎**: 日泌尿會誌, 第14卷, 6號, 大正14年. 21) **鈴木時之助**: 皮尿誌, 第32卷, 456頁, 昭和7年. 22) **山本成之助, 大森周三郎**: 日泌尿會誌, 第23卷, 4號, 昭和9年.